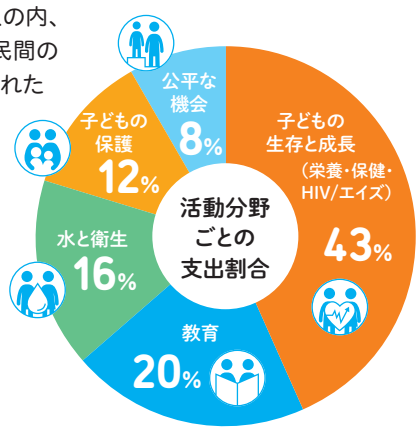
for every child すべての子どものために

皆さまからのご寄付が子どもたちの大きな支えとなっています

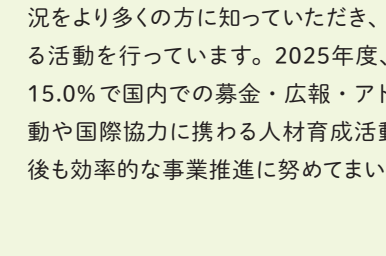
ユニセフの総収入の内、28%が世界中の民間の皆さまから寄せられたご寄付でした。



※支出合計：合計76億6,820万米ドル（2025年実績）
※割合は四捨五入しているため、合計が100%になりません。

ユニセフと各国ユニセフ協会（ユニセフ国内委員会）

ユニセフ（国際連合児童基金）は、すべての子どもの命と権利を守るため、最も支援の届きにくい子どもたちを最優先に、約190の国と地域で活動している国連機関です。国連予算の配分は受けず、子どもたちのための支援は、皆さまからのご寄付と各国政府などからの任意の拠出金に支えられています。
また、世界32の先進国・地域には、民間におけるユニセフ支援の公式窓口であるユニセフ協会が置かれており、ユニセフとの協力協定に基づき、ユニセフを支える募金活動、ユニセフや世界の子どもたちの広報活動、子どもの権利の実現を目指して行うアドボカシー（政策提言）活動に取り組んでいます。各国ユニセフ協会における国内事業も皆さまからのご寄付に支えられています。


© UNICEF/UNI962869/

子どもたちのための あたたかいご寄付をお願い申し上げます

ユニセフ募金

郵便局（ゆうちょ銀行）から

全国の郵便局（ゆうちょ銀行）からお振込みいただけます。窓口をご利用の場合、硬貨取扱料金を含む振込手数料が免除されます。
振替口座：**00190-5-31000**
口座名義：公益財団法人 日本ユニセフ協会

インターネットから

パソコン・スマートフォン（www.unicef.or.jp）からクレジットカード、PayPay、インターネットバンキング、Amazon Pay、d払い/携帯キャリア決済、コンビニ支払いをご利用いただけます。

ユニセフ・マンスリーサポート・プログラム

毎月ご任意の一定額を金融機関の口座、またはクレジットカード決済による自動引き落としでご寄付いただく「ユニセフ・マンスリーサポート・プログラム」に、ぜひご参加ください。世界の子どもたちの状況やユニセフの支援活動についてご報告する広報誌「ユニセフニュース」（年4回発行）を郵送、Eメールでお届けいたします。
お申込みは当協会ホームページまたはフリーダイヤルへ。
※公益財団法人日本ユニセフ協会へのご寄付は、所得税、一部自治体の個人住民税、相続税、法人税の控除対象となります。

親子で学べるユニセフハウスへぜひお越しください

ユニセフハウスは、世界の様々な状況で生きる子どもたちと、体験型展示を通じて出会い、「子どもの権利」について感じ、学び、考えられる展示スペースです。子どもから大人まで、幅広い方にご利用いただけます。＜第17回キッズデザイン賞受賞＞

© 日本ユニセフ協会

アクセス	JR・京浜急行 品川駅 または地下鉄都営浅草線 高輪台駅より徒歩7分
開館日・時間	平日と第2・第4土曜日10:00～17:00（祝日を除く）

公益財団法人 日本ユニセフ協会（ユニセフ日本委員会）
〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス
フリーダイヤル：0120-88-1052（母と子に）（平日 9:00～17:00）
ホームページ：www.unicef.or.jp

各種SNSもぜひご覧ください
Facebook / Instagram / TikTok / LINE @unicefinjapan
YouTube @UNICEFJapanNatCom X @UNICEFinJapan

2026年版

ユニセフ活動報告

世界の子どもたちへあたたかいご協力をありがとうございます

© UNICEF/UNI673536/Ramasomanana

unicef

日本ユニセフ協会の活動

募金活動

当協会ホームページやダイレクトメールを通じた都度のご寄付に加えて、任意の一定額を毎月の自動引き落としでご寄付をいただく「ユニセフ・マンスリーサポート・プログラム」へのご参加をお呼びかけしています。また、お選びいただいた支援物資を子どもたちに届ける「ユニセフ支援ギフト」のほか、「ユニセフ遺産寄付プログラム」、「外国コイン募金」など様々な方法でご協力をお願いしています。紛争や災害などの緊急事態下の子どもたちのために緊急・復興募金も受け付けています。「ガザ人道危機 緊急募金」、世界中で頻発する地震や洪水などの影響を受ける子どもたちのための「自然災害緊急募金」などへのご協力をお呼びかけしています。さらに、皆さまにボランティアとして募金活動にご参加いただく「ユニセフハンド・イン・ハンド募金」を街頭およびオンラインで開催しています。

© 日本ユニセフ協会

ご協力いただきました皆さまに心より御礼申し上げます

広報活動

世界約190の国と地域で展開するユニセフの活動や、困難な状況に置かれている子どもたちの現状を広く知っていただくために、プレスリリースやホームページ、SNS、資料、企画展示などを通じて情報発信を行っています。また、子どもを取り巻く課題やユニセフの取り組みをより身近に感じていただけるよう、現地報告会や講演会、シンポジウムなども開催しています。さらに、子ども向けユニセフ学習資料の制作・配布、児童・生徒対象のユニセフ教室への講師派遣のほか、ユニセフ職員や各分野の専門家を講師に迎え、学生を対象とした国際協力講座を実施しています。

アドボカシー（政策提言）活動

子どもの権利の実現を目指し、その理解を広げるとともに社会や政策の変化を促すため、子どもに身近なところから政策レベルまで様々な活動を展開しています。学校現場では、教員向け研修や教材の作成・配布を通じて「子どもの権利を大切にする教育」を推進しています。「子どもにやさしいまちづくり事業（CFCI）」では、子どもの意見が尊重され、子どもの権利が実現されるまちづくりに自治体と連携して取り組んでいます。さらに、子どもを取り巻く課題解決に向けて関係省庁と連携を深めるほか、先進国の子どもの状況を比較・分析した報告書シリーズ「レポートカード」を通じて、日本の子どもの状況を広く伝えています。

こどものけんりプロジェクト

特設ページはこちら

©NED

こども家庭庁と共催で展開する子どもの権利の啓発普及キャンペーン「こどものけんりプロジェクト」は3年目を迎え、NHKエデュケーショナルの協力のもと、子どもの権利の正しい理解と普及のための教材や、その活用をサポートするツールの提供を引き続き行っています。
2026年は、2月に「令和7年度シンポジウム～こどもの“こえ”を聴く」をこども家庭庁と共催したほか、6月に「こどものメンタルヘルスキャンペーン～“こころのこえ”をきいてみよう～」を開始しました。特設サイトでは、保護者や若者向けのメンタルヘルスに関する記事のほか、未就学児～小学校低学年向けに、変化する気持ちと付き合う方法を歌で伝える楽曲「まほうのはじまり」を公開しました。こどものけんりプロジェクトの応援キャラクターであるジーンとケーンはNHK Eテレ「The Wakey Show」に出演しています。2030年3月までの間、様々な企画に取り組んでまいります。

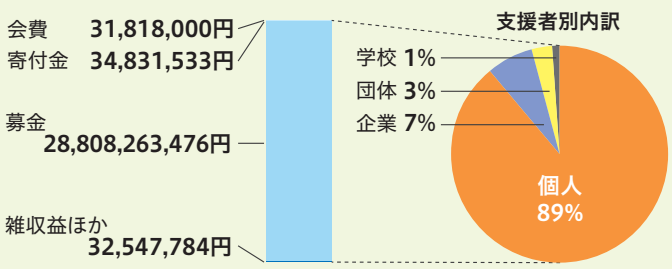
2025年度収支報告

当協会は2025年、244億4,600万円をユニセフ本部に拠出しました。これは、経常費用計の85.0%にあたります。各国のユニセフ協会と比較しても極めて高い拠出率・拠出額で、ユニセフが行う世界の子どもたちのための支援活動に大きく貢献しています。また、各国ユニセフ協会は、ユニセフとの協力協定に基づき、ご寄付の25%以内で、世界の子どもたちの状況をより多くの方に知っていただき、ユニセフ支援の輪を広げる活動を行っています。2025年度、当協会は経常費用計の15.0%で国内での募金・広報・アドボカシー（政策提言）活動や国際協力に携わる人材育成活動などを実施しました。今後も効率的な事業推進に努めてまいります。

●収入内訳（公益目的事業会計）

経常収益計
28,907,460,793円

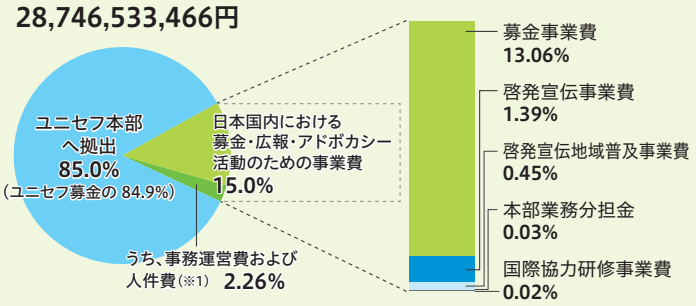
ユニセフ募金
28,808,263,476円



財務諸表などはすべて当協会ホームページで公開しております。2026年度の収支は2027年4月に当協会ホームページでご報告いたします。

●支出内訳（公益目的事業会計）

経常費用計
28,746,533,466円



※1 新公益法人会計基準に則り、公益目的事業会計の各事業費に配賦されている、事務運営費（正味財産増減計算書の光熱水費、火災保険料、施設管理料、建物減価償却費、什器備品など減価償却費）及び人件費（給料・報酬、福利厚生費、退職給付費用、賞与引当金繰入額）。詳しくは正味財産増減計算書をご覧ください。
※ユニセフ本部との協定により、日本を含む各国のユニセフ協会は、各国のみなさまからお預かりしたユニセフ募金のうち最大25%の範囲内で、募金活動、広報・アドボカシー活動などの国内事業をおこなっております。これらの活動は、ユニセフ支援の輪を広げ、厳しい状況に置かれている世界の子どもたちへのより大きな支援につながっています。
※全てのユニセフの親善大使は無償でユニセフの活動を応援してくださっており、報酬はお支払いしておりません。

子どもたちへの成果

ユニセフは最も支援の届きにくい子どもたちを最優先に、世界約190の国と地域で活動しています。

子どもの生存と成長

ベネズエラ

「震災を乗り越え、未来へ歩む子どもたち」

ベネズエラのラ・グアイラ州にある避難キャンプで、生後２カ月半のガリレアちゃんは、お母さんの腕に抱かれながらユニセフが支援する保健所で予防接種を受けました。ガリレアちゃんが暮らす地域は、大規模な地震によって大きな被害を受けた地域の一つです。

ベネズエラでは2026年６月に発生した地震により、多くの人々が住まいを失いました。学校や医療施設、水道などの生活インフラも被害を受け、医療や教育、水と衛生など、子どもに欠かせないサービスを利用しにくい状況となりました。

特に乳幼児は、感染症や栄養不良の影響を受けやすく、継続的な保健医療サービスが欠かせません。ユニセフは現地当局と協力し、被災地域に医療チームを派遣し、**地震発生から約３カ月で53,605人が保健医療サービスを受け、33,303人の子どもや妊産婦などが予防接種を受けることができました。また、14,305人の子どもの栄養状態を確認し、17,391人に安全な飲料水や衛生用品を提供しました。**さらに、心のケアを通じて、子どもたちが日常を取り戻せるよう支援しています。

ガリレアちゃんが受けた一回の予防接種は、小さな支援に見えるかもしれません。しかし、それは**感染症から命を守り、健やかな成長を支える大切な一歩**です。ユニセフは、災害の影響を受けた子どもたちが未来を描けるよう、子どもたちに寄り添い続けます。

© UNICEF/UN0392708/Lopez

子どもの保護

南スーダン

「家族との再会を願って」

南スーダンで生まれたジャルさんは、学校に通うためにスーダンに住む叔母のもとで暮らしていました。しかし、2023年にスーダンで紛争が激化すると、戦闘と避難の混乱の中で叔母とはぐれてしまい、ひとりきりになってしまいました。当時、ジャルさんはまだ12歳でした。

その後、南へ260キロ離れた町に逃げのび、洗濯の仕事をして生活費を稼ぎながら、**「母親ともう一度会いたい」という願いを胸に**、故郷への道を探し続けました。

やがてジャルさんは、南スーダン北部の国境の町レンクにたどり着きます。レンクは避難民の受け入れ拠点となっており、ユニセフの支援パートナーが、保護者と離ればなれになった子どもたちの保護と心理社会的ケア、家族を探すための支援を提供していました。

ジャルさんも家族捜索の結果、南スーダンのベンティウで暮らす母親の居場所が判明しました。そして、ジャルさんは約１年ぶりに母親と電話で話し、「本当にうれしかった。信じられない」と、喜びを語っています。**その電話は家族と再びつながる希望の瞬間**となりました。ユニセフは現在、ジャルさんが安全に母親のもとへ帰れるよう支援を続けています。

紛争や避難によって家族と離ればなれになる子どもは少なくありません。**家族とのつながりを取り戻すことは、子どもたちの健やかな成長にとって極めて重要**です。

© UNICEF/Olbo

教育

パレスチナ

「それでも私は学びたい」

17歳のヤナさんは、パレスチナのガザ地区で家族と暮らしていましたが、長引く紛争により避難を余儀なくされ、今は家族とともにテントで生活しています。雨漏りするテントでは、床がぬかるみ、電気も十分に使えません。

それでも、彼女には大学へ進学するという夢があります。しかし、テントには明かりも、集中できる場所もなく、勉強を続けることは簡単ではありません。

そんなヤナさんに希望をもたらしたのが、ユニセフとパートナー団体が運営する「学びを取り戻そう」プログラムでした。ユニセフは仮設の学習センターを設け、子どもたちの学びを支えています。2026年９月時点で、ガザ全域で**50万人を超える子どもたちが仮設の学習センターで学び、ユニセフは203カ所の学習センターを通じて33万5,000人以上の子どもたちを直接支援しています。**レクリエーションや心のケアも行われ、安心して過ごせる場所となっています。

ヤナさんは、この場所を何よりも大切にし、困難な状況でも勉強を続けています。

教育は、日常を奪われた子どもたちに安心感や希望、そして未来への力を与えます。ユニセフは学習センターの運営や教材の提供に加え、心理社会的支援や学習支援スタッフの育成などを通じて、子どもたちが未来を切り拓ける環境づくりを進めています。

© UNICEF SoP/2026

■ユニセフが支援プログラムを展開する国と地域
●32のユニセフ協会（ユニセフ国内委員会）

※地図上の国境線は図示目的であり、その法的地位についてユニセフやユニセフ協会の立場を示すものではありません。

ユニセフの支援実績

- **16億回分**以上のポリオの予防接種ワクチンを提供
- **２億5,500万人**の子どもたちに、栄養不良による消耗症の予防支援を実施
- **1,700万人**以上に衛生的なトイレを提供
- **3,400万人**以上が安全な飲み水へのアクセスを可能に
- **2,780万人**の学校に通えていない子どもたちに教育支援を提供（うち51%が女の子）

（2025年実績）

公平な機会

「能力はある、足りないのは機会」

ナイジェリア

ナイジェリアのラゴスで暮らすオバフォシュンさんには、将来、テクノロジー分野で活躍したいという夢がありました。しかし、その夢を周囲に語るたびに返ってきたのは、「女の子向きではない」、「あなたのような環境では難しい」という言葉でした。

世界では今、デジタル技術が急速に発展し、科学やテクノロジーに関する知識やスキルがますます重要になっています。一方で、世界には性別や生まれ育った環境が原因で、学びや挑戦の機会を失っている女の子たちがいます。オバフォシュンさんもまた、そうした機会を得られず、自分の夢に自信を持てずにいました。

そんな状況を変えたのが、ユニセフが支援する女の子のための教育・スキル育成プログラムでした。このプログラムでは、デジタル技術やプログラミングを学ぶ機会に加え、メンターによる助言や実践的な課題への挑戦を通じて、女の子たちが自信やリーダーシップを育めるよう支援しています。**プログラムを通じて、テクノロジーを学び、同じ志を持つ仲間と出会い、自分の力を試す機会を得た**オバフォシュンさんは、自信を取り戻していきました。**オバフォシュンさんに足りないのは能力ではなく、学び、挑戦するための環境でした。**

子どもたちが持つ可能性は、適切な学びと機会によって大きく広がります。誰もがその可能性を発揮できる社会を実現することが重要です。

© UNICEF Nigeria

水と衛生

「水とともに広がる安心」

ミャンマー

ミャンマーのチャウン・クワ村で暮らす７歳のティマさんは、自宅で安全な水を使って丁寧に手洗いをしています。

しかし、このような暮らしが当たり前だったわけではありません。2025年３月に発生したミャンマー地震により、村の給水設備の多くが深刻な被害を受けました。その結果、安全な飲み水を確保することが難しくなり、多くの家庭は安全性が十分に確保されていない水源に頼らざるを得なくなりました。こうした状況は、地域全体の健康や衛生に関するリスクを高める要因となっていました。

そこでユニセフは、2025年12月から約４カ月かけて、チャウン・クワ村に太陽光発電式の給水システムを整備しました。さらに、26基のハエの侵入を防ぐトイレを設置し、200世帯へ衛生キットを配布しました。

これらの取り組みにより、ティマさんの家族を含む**約739人が、安全な飲み水や衛生設備、衛生サービスを利用できるようになりました。**こうした支援はミャンマー全域で進められ、ユニセフは地震発生以降、**約102万6,000人に水と衛生分野の緊急支援を届けました。**

安全な水と衛生環境は、人々の命と尊厳を支える大切な基盤です。誰もが安心して暮らせる環境を実現するために、水と衛生への支援は欠かせません。

© UNICEF/UNI1000700/Ankhee Chel